支那精神（一）

市川白弦

第一部　其の成立

序　其の史的背景

一

支那大陸は人類最古の居住地のひとつであつた。一九二一年北京の西南、周口店で行はれた、北京地質調査所 Andersson 氏等による發掘、研究によつて、支那太古の社會が人類學者 D. Black 氏の所謂 Sinanthoropus Pekinensis の時代――舊石器時代初期――にまで遡り得ることが判り、且つこの人種が火の使用を知つてゐたことが、ブラック、裴文中、A. Bruil 氏等の發掘、研究によつて確められた。(註1) 最近 H. G. Creed 氏は、この人種が概して蒙古系特色を有し、「原支那人」と或種の繋がりをもつと見られるばかりでなく、舊石器時代の歐羅巴の民族に酷似する痕迹をもつことを明らかにした。(The Birth of China, New York, 1937.)

これらの出土物は、第四紀更新世に北支滿蒙に堆積したとせられる黄土層の最下部で見出された

黄土層形成後の最初の人間は、アンダースンの所謂「仰韶期」未開人である。ブラックによればこれはまさに「原支那人」(Proto-Chinese)であり、新石器時代に屬し、土器の製造、畜類の飼育、或程度の農耕を心得てゐた。(註二)關係出土物のうち、彩文土器は西北から入り込んだ Anau Susa 系文化との聯關を語るものとして、注目せられる。(註三) Buxton 氏は、原支那人とアーリア人とが元來同種に屬することを認め、兩者の肉體的差異なども結局風土的特徴に歸すると說いてゐる。(The Peoples of Asia. p.247.)仰韶期はアンダースン(華語譯「中國遠古之文化」)によれば西紀前三千年、B. Karlgren(華語譯「中國語原學研究」)によれば二千年、橋本博士(東洋古代史)によれば一千年と算へられる。(註四)

（註一）モルガンは火の使用が始まる時期を「野蠻中位狀態」に配當してゐる。L.H.Morgan, Ancient Society. p.10.

（註二）一九二〇——二一年ア氏は河南省仰韶村で多數の單色土器、彩文土器、石鏃、石斧、石鏃、豚骨、骨針、角針、土製紡錘具を發掘し、土器中に粟殼を認めた。モルガンは土器の製造を以て野蠻(Savagery)から未開(Barbarism)を區別する目印としてゐる。ibid.p.10.

（註三）同形式の彩文土器は、南露 Tripolije 印度 Mohenjo-Daro などからも出土した。原支人が彩文土器と共にトルキスタン地方から移住したといふア氏の說は、其後瑞典のカールグレン氏によつて覆へされた。

（註四）世界歷史大系第三卷九五頁。かやうな見方は、殷墟卜辭の年代算定に當つても行はれてゐるが、我々は同意できない。

二

支那における歷史時代の始めは殷代である。(註一)河南省彰德府郊外の小屯附近、羅振玉、王國維氏等

によつて「殷墟」と呼ばれる地方からの出土物(一八九九年以來)によつて、我々は西紀前一五〇〇年頃の時代(殷の後半期)に面接する。その遺物中特に注意をひくものは、白色土器、青銅器及び龜甲獸骨上の卜辭(註二)である。白色土器は轆轤使用の痕をとゞめ、化學的な檢査の結果、熱度約一千度の酸化焰で、良質の粘土を燒いて作つたものであることが知られた。(梅原末治「支那考古學論攷」第十一)これは同じ箇所から出る黑色土器に比べて形態、文樣遙かに精巧華奢であつて、當時の工藝技術の相當高度な發達これを作る技術の專門的分業化、それを使つた顯著な階級の存在を語つてゐる。このことは、同時に見出される青銅彝器の類についても言はれる。青銅器の存在は、この時代が社會的生產の飛躍的な發展の手段、熔鑛術を知るに至つたことを示す。そして文字の存在は、殷人が既に文明の第一段階に登つてゐたことを裏書きする(註三)。

(註一) 球江、揚子江文明が黃河文明と共に古いことが、近年注目せられてゐる。廣東省韶遼洲、浙江省良渚鎭などは石器時代の遺物を產した。殷代既に長江流域に相當高度の文明が展開してゐたことが、「楚辭」によつて窺はれ——詩經、商頌長發には「撻彼殷武、奮伐荊楚」と云ひ、卜辭には「戊戌卜又伐芋」(芋は楚姓)の語が見える。——越の文明が「越絕書」によつて察せられる。併しこれらの文明は恐らく苗族其他漢人種以外のものに屬し、詳細なほ不明である。

(註二) 殷墟文字に史的重要性を認めないものに橋本博士「東洋古代史」、飯島博士「古代支那の天文曆法」等があり、これを重んずるものに羅振玉「殷商卜貞考」、王國維「觀堂集林」、郭沫若「卜辭通纂」、加藤博士「支那の社會」、岡崎博士「支那史

概說」等がある。

（註三）モルガンは未開期上位が鐵鑛の熔解に始まり、文字の發明、文章の形成を以て文明に移ると規定したが（前掲書一一頁）殷墟はまだ鐵器を出してゐない。道野理學士は殷器と見られるもの二三について化學的分析の結果、それが純銅であることを確かめ、青銅時代の前に純銅時代を置かうとせられるが、（東方學報、東京第四册）その手續には尙吟味を要する點があるやうに思はれる。元來「銅」とは「混合金屬」、從つて青銅の意味であつた。（Karlgren, Philology and Ancient China. 華譯譯二九頁）

殷墟卜辭中產業に關するものは、田を卜するもの一八六、漁を卜するもの一一、年を卜するもの三四、風雨を卜するもの一〇五[註一]である。田を卜するものが最も多いのは、殷代が狩獵時代である證ではなくて、卜辭が元來王者のものであり、從つて王の遊樂に關聯したものが多いためと解せられ牧畜に關するものが少いのは、それが風雨を卜するものゝ中に含まれてゐると見られ、且つ牧畜が奴隷によつて營まれてゐたゝめだとせられる。（郭沫若「中國古代社會研究」邦譯三四三、三六〇頁）年を卜するものゝ中では「黍」の字最も多く、來（小麥）、麥、禾これに次ぎ、米の字も見出される。耕具には石鋤、石耨、石杵などがあつた。「田」はもと「狩獵」の意味であり、またそのための原野を意味したが、次で牧草保育の場所ともなり、更にこの事情から農耕生活が展開したと考へられる。[註二]卜辭の性質とその內容から見て、殷代では狩獵は既に貴族の遊樂になつてゐたと察せられる。

（註一）羅振玉「殷墟書契考釋下卷」。（陳安仁「中國上古中古文化史」の計算による。小島祐馬氏「殷代の產業に就いて」（「支那學」第三卷第十號）其他の文獻では、前記の數が何れもかなり少くなつてゐるが、これは羅氏の舊版に據つたものであらうか。）

（註二）卜辭には「土方ニ田ス」、「呂方ニ牧ス、我示レ棘ヲ田ス」の語が見え、更に「其田麥畢」、「麥田」等の字が數ヶ所に見られる。詩經には田野で牧農を兼ね行ふことを示す歌がある。（小雅、楚茨）

郭沫若氏は以上の狀況を綜合して、殷代が（一）社會的生產方法は牧畜であり、農業生產が現れてゐたこと、（二）金石併用時代であつたことを推論した。（前掲書三七六頁）この推定は今日相當廣く支持せられてゐるが、私は右二點とも一層前進的に見て、（一）農業が主要生產形態となりつゝあり、（二）初期靑銅器時代であつたと考へたい。そのわけは、（一）卜辭中の「其田麥畢」、「和叀麥田亡戈」等の字句は、明かに農耕のための田野の存在を語り、同時に禾、來、麥、黍、瓜、豆等の字がかなり多數見出され、それらは家畜の糧といふよりも人間の主食物と見るべきであり、年を卜するものが相當にあり、風雨を卜するものが壓倒的に多く、そして風雨は牧畜によりも農耕にとつて一層重要だと考へられるばかりでなく、同時に多種多數の農具が發見せられてゐること、「農」の字が大同少異の形でかなり多數見出されること、田及び疇字の象形が多くの田の並存を暗示すること、出土物に紡綞具、繩文土器が在ることは麻の栽培を推定させること、盤庚が殷に遷らうとした時、衆人が

居に安んじてそれを肯んじなかつたこと（尚書、盤庚篇）、殷に遷つてから紂王の沒落まで七百七十餘年遷都がなかつたこと（史記、殷本紀）等の諸事實は、殷代の農業生産が相當顯著な發展をとげてゐたことを語るものであり、（註一）（二）今まで發掘せられてゐる關係遺物は、勿論夥しい數ではあるが、尚まだ殷代の器物の一部に過ぎないであらうこと、鐵器が銅器に比べて腐蝕し易いこと、鐵が所謂「美金」（銅）に對する「惡金」であつて、珍重保存せられる器物とならなかつたこと、（註二）龜甲獸骨に刻字する際に使つたものが、青銅よりも硬い鐵製のものではなかつたかといふ點、この時代の銅利器に實用の域を脱して裝飾化したものが相當にあり、この樣式の銅利器は、諸外國の遺跡に關する考古學上の成果から見て、利器用として一層適切な鐵の發見が行はれた時代に屬すること、（註三）これらの事情は、一般に青銅期以後の段階を特徴づけるものと解せられるからである。殷代についてこのやうな見方が成り立つとすれば、我々は古代社會に關するモルガンの規定（前掲書一一頁）に一應接近するわけである。

（註一）比較的信用のできる尚書、盤庚には「若農服田力穡、乃亦有秋」、「墮農自安、不昏不作勞、不服南畝、越其罔有黍稷」の語が見え、詩經、商頌には「自天降康、豐年穰々」、「稼穡匪懈」と歌つてゐる。「社會（殷代）は農耕に基礎を置き、そして恐らく上層下層の間に、鮮明な階級的差別をもつ貴族社會であつた」Latourette, The Chinese: Their History and Culture. p.41.

ちなみにボクロフスキー氏は、野生の獸類を馴らし改良して、家畜にすることが如何に困難な仕事であるかを指摘し

て、次のやうに結んでゐる、「このことは、牧畜が農耕より後れて生じたこと、農耕あつての牧畜であることを意味する。」「露西亞文化史概論」、深見譯、四二七頁

（註二）張官鼎氏は、この時代の文字中農具を意味するものに、耜の外になほ鎛、鉏、錢など何れも金に從ふものがあり、而も未だ銅製農具が發見せられず、石製農具に次で鐵製農具が見出されてゐる事實から推すと、殷代の農具も亦鐵器であつたらうと云つてゐる。「中國歷代耕地問題」、五七頁

（註三）殷代鑄銅術の著しい發達について、梅原教授は詳細な論證をせられた。（支那考古學論攷、第五、第十一、等）そして同地出土の石器を以て、總て前時代のものと推定せられた。若しこの推定が、殷代に石製農具が全く使はれなかつたといふ意味であるならば、それはどうかと思はれる。既に氏自身も認めて居られるやうに、精巧な白色土器と同時に粗末な黑色土器が存在したとすれば、同じ社會的事情によつて、精緻な青銅禮器と同時に粗末な石製農具が存在したと考へ得られる。農業生産手段の著しい劣性は、必ずしも今日の社會的特徴ではあるまい。鐵製農具があつたこと、張氏の言ふ通りであつたにしても――當時は貴族も尙農耕を營んだ。（尙書、無逸）――尙依然として石製農具しかもたぬ下層農民があつたのではないかと思はれる。これについては、今日の支那の極度に單純な農具が語るやうに、黃土そのものゝ易耕性をも併せ考ふべきであり、「深耕易耨」の語が春秋時代に現はれてゐる事情（後述）にも注目してよからう。尙、各遺物の發掘當時の土地の階層關係が明らかにせられる必要があると思はれる。

殷人は黃河流域に定住する以前は、西北の高地において、狩獵遊牧に從事してゐたであらう。一九〇三年、南部 Turkestan 地方に向つて行はれた R. Pumpelly 氏第一回探檢隊の報ずる所によれば、中亞盆地 Kara-kum の沙漠地帶を圍む南北の兩山系は、曾て廣大な氷原に蔽はれてゐたが、

この氷原の退却に伴つてトルキスタン地表に大乾燥作用を生じ、乾いた泥土は風に捲上げられて、その微細なものは遠く黄河流域に達し、甘粛、陝西一帯に黄土層の形成を見た。新疆 Tarim 盆地が Takla-makan 沙漠に蔽はれるに至つたのも恐らくこの時代のことで、樓蘭やタクラマカンの埋没都市の遺跡が語るやうに、曾ては居住に適する平原であつた。タリム盆地におけるこの地理的變化は、住民の大移動をひき起し、その一部は恐らく彩文土器出現以前、「原支那人」の先發隊として、燉煌、甘粛の谷に沿ふて南下し、渭水流域に到達したと察せられる。(註一) この時代前後かれらが遊牧に従事してゐたであらうことは、蒙古、支那領トルキスタン地方に多數出土する遊牧民特有の細石器が、甘粛の諸地方にも見出されること（駒井、後藤「東洋考古學」三八六頁）、盛庚以前に遷都が頻繁であつたこと、(註二) 殷墟から豕の骨が多數出土し、甲骨文に牛、馬、犬、豕等の字が見られること（張霄鳴、前掲書七〇頁）、上古の酋長達が自らを「牧者」と呼んだこと、著、義、詳などの字が何れも羊に從ひ、着は羊の見張、義詳は羊の所有についての紛爭に關聯した文字だと見られること（Encyclopaedia Britanica, Chinaの項）等によつて推定せられる。

（註一）原支人とシナントロプス・ペキネンシスとの聯關は尙不明である。前者の南下以前、既に後者の末裔が河南にその文化を展開してゐたかもしれない。言語學上、支那語がウラル・アルタイ系と違ふ Sino-Tibetan 語系に屬する點から、この民族の南方起原説をなすものもあり、——Maspero, Wieger 氏等。橋本博士もこれを支持せられる。前掲書一〇六頁

――將來、南支那に關する考古學的研究の進展と共に、これが立證せられる時があるかもしれぬが、今はこの說をとらない。これについて Otto Franke は、かやうな見方は、新しい人種的要素が其後幾千年を通じてたえず北方から流れ込んだといふ史實に適合せず、且つ文字も文學もない民族が、短期間にその言語を他の言語と取換へた例が、最近においても見出されることを反省すべきだ、と評してゐる。Geschichte des chinesischen Reiches. 邦譯、六五頁以下

（註二）「自契至湯八遷」（史記、殷本紀）、「茲猶不常寧、不常厥邑、于今五邦」（尙書、盤庚）。

藤田敎授は遷都の理由を洪水に置かれるが（岩波講座「支那古代の歷史地理」）農耕の著しい發展期と見られる盤庚以後の土地への定着の事實に注目すべきではあるまいか。「自盤庚徙殷至紂之滅七百七十三年、更不徙都」（史記、同上）。牧野巽氏は遷都の理由に「火田法」を擧げられる。（東洋文化史大系九九頁）この說に從ふとすれば、農業生產の開始は殷代以前にまで遡ることができよう。クノーは、農耕への移行は定住の先行條件ではなく、寧ろその逆だと言つてゐるが（H. Cuno, Die Marxische Geschichts-, Gesellschafts-und Staatstheorie. Bd. II, S. 86.）我々は必ずしもこれに同意出來できない。最後に、白鳥博士は「支那上代の傳說は天文星辰の知識を經とし、儒敎の道德思想を緯として組織されしものである」といふ見地から、種々示唆に富んだ解釋を行ひ、殷代遷都の回數なども、結局天文學的知識の反映であるとせられるが（世界歷史大系第三卷二〇〇頁に據る）、この見地からは、盤庚以後何故遷都が行はれなかつたか、七百七十三の數が天文學的知識とどんな關係にあるかゞ說明せられず、またこの見解が成り立つにしても、それは直ちに殷代の頻繁な遷都の事實を否定することにはならないであらう。

三

我々は殷代に氏族制の發展と、國家形成の素地とを見る。

一部の史家は、氏族制が所謂プナルア家族（Punaluan family）から發展したといふ見解に從つて支那古代史を取扱つてゐるが、（郭沫若「中國古代社會研究」、曾寶「中國古代社會」、佐野袈裟美「支那歴史讀本」）我々の考では、プナルア制はそのまゝで直ちに血統を問題とし――その場合には、母系制が成立する――ひいて氏族制に展開するのではない。プナルアは元來性的關係を示す稱呼ではなくて、世代層を示す言葉であり、（Gruno, Zur Urgeschichte der Ehe und Familie. S.64.）この稱呼を機緣として發生する婚姻上の制約から、族外婚（Exoganie）が開始せられると共に、始めて血統を問題とし、トーテムを中心とする家共同體（Hausgenossenschaft）――その意味で一種の大家族――が現れるに至つて、氏族制の地盤が成り立つのである。

トーテム共同體の特色は、（一）世代層集團から成る族外婚制、（二）母系制、（三）一種の民主的共產制である。トーテミズムの形迹としては、「詩經」、「史記」の玄鳥說、「山海經」の諸帝系譜（註一）などを擧げることができる。世代層の稱呼については、卜辭の「三父ニ告グ」「多父ニユク」「多父ヲ帝（マツ）ルニ貞（ヨ）シ」などの語が注目せられ、族外婚の遺風と見られるものに、春秋時代まで一般に殘存した同姓不婚の習俗があり、母系制については、殷代帝位の繼承が「兄終、弟及制」であつたこと、王國維氏等の論證するところである。氏族民主制（註二）については「王命衆、悉至干庭」（尙書盤庚）「小司寇職、掌外朝政、以致其民而詢」（周禮秋官）などにその殘影が認められ、かの「殷人七十而助」（孟子、滕文公章上）の傳說が、何程かの史實を含むものとすれば、それは氏族共產制を語るものと言へよう。

何れにしても殷代には既に氏族制が確立してゐたと見るべきで、卜辭中の「多子」「五族」「王族」等の稱呼が、これを裏書きしてゐる。(註三)

(註一) 「天命玄鳥、降而生商、宅殷土芒々」(詩、商頌)「黃帝生駱明、駱明生白馬、白馬是餘也」「黃帝生黃龍(中略)弄明生白犬、白犬有牝牡、是爲犬戎焉」(山海經)。なほ李則綱氏は支那上代のトーテミズムについて、詳しい說明を與へてゐる。(「始祖的誕生與圖騰」一四頁)

(註二) 支那上代において氏族を意味するものは、「氏」ではなくて「姓」であつた。氏は姓よりも後にできた觀念である。加藤常賢「支那家族制度に於ける主要問題」漢文學講座第一、橋本增吉「支那古代における姓氏の意義に就きて」史學雜誌第二二編第七號。

(註三) 「商代社會組織是氏族社會時代(中略)『多子』是一個氏族的名稱、『五族』是五個氏族、『王族』是領袖諸氏族的部長」(馬乘風、中國經濟史第一册二二頁)。但し、郭沫若氏はこの時代を以て、氏族社會から奴隷社會(周)への過渡期と見てゐる。

併しながら母系的氏族共產制は、多くの場合、所謂プナルア制の行詰による掠奪婚の風習化、農耕生活の發展に伴ふ、男性の狩獵から農耕への轉向、女性の農耕から屋內生活への後退等の諸事情による、女性の地位の從屬化並びに族外婚に立脚する母系トーテム制による家族制的結合の混亂、弛緩等の事態から父系的體制に轉化する。この移行は支那において、既に殷代までに行はれた。曾謇氏はこの消息を次のやうに述べてゐる。(「中國古代社會」上、二七頁以下)

一、人的身分は兄弟相繼ぐとはいへ、專ら父系親に限られ、母系親に及ばないこと。

二、母妣の地位は、先妣を特に祭る慣習において、尙母性社會的な尊嚴を保つとはいへ、而も先王、先公の祀の頻繁且つ隆盛であるのに及ばないこと。（曾氏は母系的と母權的とを同一視乃至混同してゐる。我々は支那上古に母權制の存在を認めない。）

三、卜辭中、母妣を特祀する辭には、母妣名の上に必ず王完(賓)某々と冠してゐる。

四、殷代の勾刀三振の銘文に、三世兄弟名を列記するに當つて、大祖、大父、中父、大兄の別をら明らかにしてゐる。（世代層的稱呼の消滅）

父系的父權制の確立と共に、氏族の族長の間には、土地以外の二三の動產物について、私有觀念が現はれつゝあつた。このことは尙書盤庚の「朕不肩好貨」「無總於貨寶」、甲骨文の「錫貝」「錫多女貝朋」などによつて窺はれる。奴隷も既に在つた。卜辭には俘、奴、奚、妾、僕の字が見え、奴隷の主なる給源が捕虜であつたことが俘、奴、奚の字の原形が捕縛された者を連行する形を示す點から察せられる。

以上の考察から、我々は殷代において、(一)土地定着的な農業生產が開始せられ、(二)種族共同體の內部において、父家長的氏族共同體への移行が行はれ、(三)財產私有への傾向が現はれ、(四)征服による他種族の奴隷化が發生し、この全過程を通じて、次の周族による早期封建國家創成への

條件が、殆どすべて準備せられつゝあることを知つた。卜辭には既述の如く「王」の字も現はれてゐる。

（註）「王」の字は、もと火の盛なる形を示し――「說文」の解釋は、儒家の附會――ひいて氏族乃至部族中勢力の盛なるものを呼ぶ言葉となつた。殷代の王號について、馬衆風氏は述べてゐる、「和後世之所謂『王』的概念是有異的、最多只能當作一種萌芽形胎而已、盤庚篇中所謂之『邦伯師長』、可當作氏族長的樣子看。」（前揭書、二二頁）

四

農耕的生活はその性質上、狩獵的乃至遊牧的生活に比べて冒險的、攻擊的精神を培ふことが少い既に農耕の民として定着しつゝあつた殷代末期のこの部族は、以前の團結性鬪爭性を減じ、武力的に弱くなつてゐた。殷の諸王は、その植民的膨脹による占住地擴大の途上、他部族との鬪爭において、西北境岐山の邊りに半遊牧的未開生活を營んでゐた周族を軍隊として利用した。この事情が周族の軍事組織を强化した。殊に彼等は東南の部族がもたぬ馬を戰鬪に使つてゐた。――詩、周頌の諸篇は、軍馬の颯爽たる陣列を幾度か讃嘆してゐる。――そして河南の沃野は、彼等が羨望の地であつた。西紀前十二世紀末、周族は隣接諸部族と同盟して殷族を仆し、これを種族共同の奴隷（農奴を含む）とした。[註一] 左傳に言ふ、「昔武王克商、成王定之、選建明德、以屏藩周（中略）分魯……以殷民六族（中略）分康叔以殷民七族」（定公四年）。詩に言ふ「王曰、叔父建爾元子、俾侯于魯、大啓爾

宇、爲周室輔、乃命魯公、俾侯于東、錫之山川土田附庸」（魯頌）。卽ち、同姓の有力者に殷民十三族を與へ、新しく擴げられた領土の邊境を固めるため、土地を與へて各地に分封し、周室の藩屏としたのである。かくて周室を家長とする宗家對分家の關係において四隣を統一し、この關係を軸として異姓諸部族をも一應冊封の形式において臣屬させた。

周の封建制を組織し、且つ特徴づけるものは「宗法」である。これによれば、同族の最年長者及びその子孫が大宗となり、その統轄の下にその他の諸家が小宗として、王室から「氏」を賜つて分封せられ――「姓」を賜つた例はない。「姓」は今や婚姻關係においての外、實際の意味をもたなくなつた。――大宗は祖の祀を奉じて百世遷らざるもの、小宗は禰の祀を奉じて五世にして遷る（大宗との關係が解消する）ものとせられ、小宗も亦以上の關係に準じて子孫を分家統轄するのである（註二）

宗法を中軸とする支配體制の確立と共に社會の階級的區別が一層明かになつた。治者階級は君子大人、百姓と呼ばれ官僚的貴族の階級であり、被治者は小人、庶民、群黎などと呼ばれ、平時は農耕に從ひ、戰時には兵卒として徴集せられる一種の農奴である。（郭氏が詩經から引例した「奴隷」は、多くこの農奴であつた。）その中には奴隷も存在した。郭氏は周代の祭器の銘から、奴隷の賜與、賣買に關する文獻を擧げてゐる。（「中國古代社會研究」邦譯四三六頁以下）これを要するに、周は奴隷制を伴ふ農奴制に立脚し、宗法による氏族的精神を保つ初期封建國家であつた。周族の支配下に歸した諸部族長

（群后）の占有地「萬國」を併せて「天下」と稱し――「溥天之下、莫非王土」（詩、小雅北山）――之を統治する者を「元后」「王」「天子」と呼んだ。

周社會が農業的生産に立脚したことは、（一）后稷を以て周の祖神としたこと（詩、魯頌閟宮）（二）たとひ不完全な形にせよ井田制[註三]が在つたこと（小雅、北山、大田）、（三）農奴及び奴隷を監督する官吏「田畯」が存在したこと（小雅、甫田）（四）この時代、農耕に關する歌が壓倒的に多いこと、などによつて明らかである。

（註一）希臘＝羅馬的社會との相違。周人は主としてゲマインシャフトリヒな關係において、即ち共同體を通して、奴隷を所有した。ヘーゲルは奴隷制の創始を秦始皇帝に歸してゐるが（Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte. Reclam.S.186.）これは當つてゐない。尙、かれは次のやうにつけ加へた、「併し支那においては、必然的に奴隷制と自由との區別が、さほど大ではない。皇帝の前には總ては平等である、即ち總てが一樣に貶下せられてゐるからである。」

（註二）傳說（史記、殷本紀）によれば、同族の分封は既に殷代に行はれた。

周代について、陶希聖氏（中國封建社會史）、郭沫若氏（中國古代社會史論）は典型的な奴隷制時代と言ひ、橋本博士（東洋古代史）は最も純粹な封建制時代と規定せられた。これは何れも穩當でない。周は古代羅馬における樣な純然たる奴隷制をもたず、奴隷、農奴、自由民の區別がさほど明確ではなく、また周の封建制は、氏族制の延長と見られる「宗法」に基づいてゐる。思ふに橋本博士の規定は、秦の郡縣制との對比においてなされたものであり、その限りにおいて一應正しい。

（註三）井田制の存非については、なほ討究を要すると思はれる。郭沫若氏（中國古代社會研究、四四一頁）及び張霄鳴氏（中國

歴代耕地問題七五頁）は井田制の存在を認めない。なほ郭氏は、周による國家の成立過程を、最も鮮かに描いたものとして、詩、大雅公劉篇を擧げて、興味ある解説を加へてゐる。（前揭書、一五七頁以下）尤も詩經は、周代においては、口誦として傳つてゐたにすぎなかつた。

五

一層信賴のできる支那の歴史時代は、周の東遷（西紀前七二二）以後、卽ち春秋時代に始まる。この頃、黄河中流地帶に群居した舊諸侯に對し、邊境に新領主「五伯」が興り、舊諸侯の土地と奴隷とを奪ひ合つた。この機運は、兵器の世界における鐵の出現普及によつて激化せられ、商業資本の擡頭による土地の私有化、土地の兼併、舊貴族の沒落といふ一聯の事情と共に、所謂戰國時代を現出した。この劇しい新社會狀勢に對處するため、封建諸侯は、その技術的助手を必要とした。齊の宣王（前三四二——三二四）はじめ、多くの諸侯がこの技術者を養成した。韓非子は言ふ、「利之所在、民歸之。名之所彰、士死之。」（中略）故中章胥己仕、而中牟之民棄田而隨文學者、邑之半。」（外儲說左上）孔子のもとに集つた者も、同じ野心家たちであつた。「子曰、三年學、不至於穀、不易得也。」（論語泰伯）封建的新官僚がこのやうにして出現し、漸次その社會的地盤をおし擴げた。「諸子百家」といふものが、これである。「故曰、或勞心、或勞力。勞心者治人、勞力者治於人。治於人者食人、治人者食於人、天下之通義也。」（孟子、滕文公章）「上流階級には何よりも先づ道德生活、併し下層階級には第

一義的な經濟生活。(註一)」かくて封建的官僚の意識形態が成立し、同時に君子、小人の別が愈々明らかとなつた。君子を統べるに「禮」、小人を統べるに「刑」があつた。(註二)君子は禮を勤め、小人は力を竭す禮は庶人に下らず、刑は上司に達せず、といふ通念が、このやうにして成り立つた。禮の主なる効用は、(一)習俗を異にする異民族統合のための媒介、(二)士君子間における身分制の確保であり、これを貫く精神は中庸の倫理——「敖不可長、欲不可從、志不可滿、樂不可極」、(禮記典禮)——であり、そして主君子に共通な心術は、明哲保身主義——「危邦不入、亂邦不居、天下有道則見、無道則隱、」(論語泰伯)——であつた。

支那の倫理及び哲學の淵源が、元來(封建的)官僚の學であつたことに、注目すべきである。——この國には僧侶階級は發生しなかつた。しかしマホメット的國家が成立した。——こゝに支那思想一般のひとつの根本的性格が横はつてゐる。

(註一) 孔子教の信奉者、清朝の高官陳煥章が孔子の學說を要約した言葉。(Chen Huang-Chang: Economic Principles of Confusius and his School. p.95.) 佐藤氏譯に據る。

(註二) この制度を批評してモンテスキューは言つてゐる、「支那の立法者は宗教、法、習俗及び生活樣式を混同した。これらすべては道德であり、德性であつた。この四點に關する規範が、典禮と云はれたものであつた。これらの典禮の正確なる遵守の點において、支那の政體は優れてゐた。」(「法の精神」上卷、岩波版四二三頁)「後者(アジア)において人民は

棒によつて統治される。（中略）而してアジアの人民が刑罰と呼んだものを、歐洲の人民は常に侮辱と呼んだ。」（同、三七九頁）

生産力はこの時代にめざましく發展した。鐵製農具による深耕及施び肥の普及があつた。「深耕易耨」と孟子は報じてゐる。「曰、許子以釜甑炊、以鐵耕乎。曰、然。」（孟子、滕文公章句上）「美金以鑄劍戟是試狗馬、惡金以鑄鉏夷是試壤土。」（國語齊語）施肥の研究、所謂土化法については周禮、管子、呂氏春秋、淮南子などに明らかである。

諸侯は土地に對する課税の開始――「初税畝、非禮也。」（左傳、宣公十五年）――蠻族との活潑な交易によつて富を作つた。經濟上戰略上からの陸路水路の開拓、「關」による障碍の廢止、新しい兵器、戰術の發達、舊封建諸侯の沒落等の諸事情によつて、全支統一の機運が熟しつゝあつた。（註二）これに乘じたものが秦である。秦は鐵、鹽の豊富な産出に惠まれ、邊境の蠻族との鬪爭を通して兵備を强化し蠻族との同盟またはそれの併合によつて領土を擴げ、大規模な灌漑工事（註三）によつて農業の生産力を高め、西紀前二二一年六國を併せて天下を一統した。司馬遷は秦の成功の主因を大運河鄭渠の開鑿に歸してゐる、「渠就、用注塡閼之水、溉澤鹵之地四萬餘頃、收皆畝一鍾。於是關中爲沃野、無凶年秦以富彊、卒併諸侯。因命曰鄭國渠。」（史記河渠書）

秦は宰相商鞅（前三五二――三三八）等の献策によつて、郡縣制の創設、武器の沒收、田賦の制定

幣制、文字、車軌、度量衡の統一を斷行、土地私有を公認、そして天下の富豪十二萬戸を地方の大諸侯と共に、其の氏族的地盤を離れて首都咸陽に移轉させ、黄河と淮河とを結び揚子江に達する大運河及び首都と地方とを繫ぐ陸路の築造を試みた。從來の「王」號を廢し、秦室の支配を萬世に及ばさうとして、先づ「始皇帝」と稱した。この大規模な中央集權的國家形成のためには、人よりも先づ組織が重んぜられねばならなかつた。且つ天命思想による政治哲學は、政權の獲得には便利であつても、それの維持には必ずしも便利でなかつた。周以來の「德治」主義は、法治主義(註三)に置き換へられ、封建的新官僚の間に行はれてきた一種の自由主義的言論は、一齊に彈壓せられた。——この獨裁政治に理論的基礎を與へたものは、韓非子のホッブズ的政治哲學であつた。——併しこの秦の統治も、その肆意的專制主義のために、とりわけ土地私有制からくる商業資本による土地の兼併從つて政府所得の遞減、農民への課稅の加重、長城などの構築による徭役の倍加、これらに基づく田園の荒廢のために、大規模な農民の叛亂をひき起すに至り、この機に乘じた「漢」によつてうち倒された。併し秦によつて輪廓づけられた行政組織の大綱は、大體において一九一二年「支那革命」の當初まで存續した。

（註一）「所以由春秋開始一百四十國、到了戰國末期歸便併成了七國。同時隨着封建諸侯不斷戰爭的結果、打破了往日分封自守的塞局勢。交通的連鎖一旦展開、客觀上幫助了封建各國間交換關係益加密切也。就更加促進了商業資本順利的向前發

展。」（蔡雪村・中國歴史上的農民戰爭、一四頁）

この著者は、秦代に封建制の動搖、商業資本社會の出發を見てゐる。併しこれは、精々ギリシア＝ローマ的商業資本の段階であつた。佐野袈裟美氏は、春秋時代を以て奴隷社會から封建社會への轉換期と見てゐるが、（「歴史」、昭和十二年七月號）我々はこれに同意できないこと、既述の通りである。

（註二）灌漑施設は史前期から在つたと思はれるが、周代にその存在を語るものとして、詩、小雅、隰桑の「滮池北流、浸彼稻田」を擧げることができる。

（註三）法治主義について「尹文子」が語つてゐる、「田子、書を讀んで堯の時代は泰平であつたと云ふ。宋子曰く、聖人の政治が此の泰平を致したのか。彭蒙側より答へて言ふ、此の泰平を致したのは、聖法であつて、聖人の政治のためではない。宋子曰く、聖人と聖法との區別は何か。彭蒙言ふ、聖人とは己より出づるものであり、聖法とは理より出づるものである。」H.Maspero, La Chine Antique. 1927.（岡田博士の譯による。）

六

春秋、秦漢時代は、支那の文化が從來の狹隘な制約を脱して、自由な飛躍をとげた時代であつた。この飛躍は、外來文化との接觸によつて促進せられ、なかでも北方から入り込んだスキタイ文化もしくは Scytho-Siberian 文化との接觸によつて、併し漢民族獨自の手法を通して、行はれた。北方の秦を始め當時の諸侯は、所謂「戎と和するの五利」[註一]に依つて、盛に北方の蠻族――蠻族とは事實上、恐らく人種的相違による稱呼であるよりも、寧ろ文化上の差異によるそれであつた。――

と交易し、これによつて巨富を占めたが、スキタイ文化の流入、そして逆に支那文化の西漸、も亦この過程を通して活潑に行はれた。スキタイ文化の原地は、黒海の東岸及び北岸に亘る草原(ステップ)地帯、卽ち南露の Don Donieper 河の流域地方だとせられる。この地方は、古く新石器時代に、殷墟出土の彩文土器と相似たアナウ・スーサ系文化に屬する、Tripolje 文化の存在した所であるが、その後スキタイ人(Scyths)、次に同人種のサルマテ人(Salmatians)の居住する所となり、西方ヘレニズム文化の影響の下に、半遊牧民特有の青銅文化を生み、その特色を種々の銅器、織物などの遺物に留めるに至つた。なかでも注目せられるのは、一九一二年露西亞 Kozlov 探檢隊が、北蒙古 Noin-Ula 山地において多數の古墳を發掘、その副葬品において、スキタイ系、希臘系及び支那系(絹と漆器)文化の諸要素を認めたことである。(註二) 梅原教授は述べてゐられる、「同國(ロシア)では紀元前七、八世紀頃から、黒海の沿岸を中心として現れたスキタイなる半遊牧民が、ギリシア其他の南方文化に接觸して、その影響を受け乍ら、特色のある一個の文化所産——それは藝術上では一種の特色ある動物文で代表せられるもの——を有するに至り、それを半遊牧民たる性質から東西に傳へて、古代における東西文明の接觸に一つの役割を演じた。」(支那考古學論攷、第二十二)

次で一九二七年、露西亞 Rudenko 教授のアルタイ探檢隊に屬する Grijaznoff 氏は、Shibe 地方に古墳を發見、三〇年には Pazyrik に古墳を發掘し、後者においてスキタイ系及び希臘系の文化

を認め、前者において之に加へて支那漢代の漆器其他を發見した。（梅原氏「古代北方文物の研究」第八）これより先、英國 Stein 氏は新疆省樓蘭發掘の古墳において、支那絹と共に、メソポタミア起原と察せられる副葬品を發見してゐる。秦代の馬具におけるスキタイ文化の影響については、一般に認められるところであるが、梅原教授は更に漢代の植物文様に、希臘文化の迹を見られた。（前掲書第七）今日黄河上流に用ひられてゐる皮筏が、古代からチグリス河に用ひられてゐるそれと殆ど同形式であることは、人の知る通りである。支那語の「大風（ダイフン）」、亞剌比亞語の tufan 希臘語の tuphon が聯關乃至分岐したのはいつの時代であらうか。K.rlgren 氏は官話の不規則的有氣音にトルコ語の轉寫音を見たが、（東方學報第四期）C.J.Pall 氏は支那語とスメル語との多くの類似點をあげ、支那人の祖とスメル人とは、西紀前四千年頃中亞高地に共住してゐたであらう、と推定してゐる。（Chinese and Sumerian. p.10.）地理學者 Bl.che は云ふ「彼等（支那族）と中央アジアとの關係は決して絶えなかつた。彼等は其處から硬玉や馬を得たのであり、其處に永く彼等の絹市場を設けた。（中略）中央アジアの斜面に生れた耕作との或る聯絡關係が、明かに殘つてゐる。斜面を流れる川を人工的水系に分ける巧みさや、高臺と谷間の耕作地を結合する腕前などがそれである。（註三）」前漢時代、旅行家張騫が新疆から中央亞細亞に至り、其地の文物を支那に傳へたこと、續いて西域都護斑超の部下甘英が中亞に遠征し、ペルシア灣頭に達したことは、歴史に明らかである。漢鏡の様式が西漸し、またギリシアの技法が漢鏡に反映した。「漢書地

理志」はビルマ方面との交通を傳へ、「後漢書西域傳」は大秦(羅馬)との交易を語り――その頃漢人は「絹の國の人」として西方に知られ、羅馬その他に絹市場をもつてゐた。――そして「南史夷貊傳」(李延壽)は扶南(今のカムボヂア)、呵羅單(スマトラの一部)、婆皇(馬來半島バアン)、婆利(ジャバ東方のバリ島)などの國名を擧げてゐる。(白壽彝「中國交通史」による)

我々はさきに、シナントロプス・ペキネンシスが歐羅巴の古代人と酷似する骨骼的特徴をもつこと、原支那人がアーリア人と恐らく同種であらうといふこと、かれらの彩文土器と同樣式のものが南露、中亞、印度などに出土することを知つた。そればかりでなく、從來支那獨自のものと考へられてゐた「鼎」「鬲」などに見られる三足土器が、Troy の第一都市その他から發掘せられて以來、仰韶文化と西方文化との聯關を說く學者さへも存在するのである。(註四) 古代支那の天文學が、バビロニア地方の天文學に繫がることは、一般に認められるところであるが、新城博士は、周代に一時西洋流の月の四分法、卽ち週法が行はれたことを指摘せられた。(註五)

支那上代の文化は、考古學的研究の發展と共に、他の國の諸文化と同じく、世界史的觀點から見直される可能性が、今後一層增大するであらう。

我々はこゝで、支那精神の史的背景乃至環境に關する序稿を終りたい。周――漢の間こそ、支那精神史上最初の重要な領域だからである。

（註一）「和戎有五利焉。戎狄慕居、貴貨易土、土可買焉、一也。邊鄙不聳、民狎其野、穡人成功、二也。戎狄事晋、四隣振動諸侯威懷、三也。以德綏戎、師徒不動、甲兵不頓、四也。監於后羿、而用德度、遠至邇安、五也。」（左傳、襄公四年）

（註二）W.P.Yetts, Discoveries of the Kozlov Expedition.「歴史と地理」、第十九卷、三、四號、小牧氏譯による。

（註三）Blache, Principles de Geographie Humanie. 山口氏譯（六二頁）による。

（註四）Arne, Painted Stone Age Pottery from the Province of Honan, China. 濱田耕作「東亞考古學研究」（一六〇頁）の紹介による。アルネ説はアンダースン説を批評したものであるが、ア氏はこれに答へて、鼎は別として鬲の獨自性を反覆主張してゐる。濱田博士はア氏の説に同意し、且つ鼎鬲の同一起源を主張せられた。（一六二頁）

（註五）新城新藏、「天文」（岩波、東洋思潮講座）。ラトウレット氏も亦、周代に現れた曆法及び計時法上の變化を、外來的なものだと指摘してゐる。（Latourette, The Chinese: Their History and Culture. p.69.）

尙、新城博士は支那天文學が西方のそれとは獨立に發生展開したと説かれるが、これに對して飯島博士（「支那曆法起原考」）は、それの希臘起原を主張せられた。

（附註）人間がその人種の如何を問はず、相似た刺戟乃至事象に對して、屢々相似た意識乃至動作を起すやうに、たがひに隔離した數個の民族が、相似た環境、生活型乃至史的段階において、互ひに獨立して相似た技術的作品を生みだす可能性が考へられる。從つて一民族と他民族との有する生活要具の樣式の類似から、直ちに兩民族の事實上の交渉を結論するのは、早計だと云はねばならぬ。上來の問題に關して、一應このことが反省せられてよからう。

第一　「后土」觀念の成立

一

北支那を蔽ふ黄土層は、北は蒙古の境、西は新疆タリム盆地に始まり、東は山東省、南は揚子江流域に及び、面積約十一萬九千方哩、體積約二千八百五十二立方哩と報ぜられてゐる。（東亞協會編「北支那總覽」三五頁）この土壤は、獨逸の地質學者 Richthofen によつて、Loess と呼ばれた黄褐色の、石のない、粘り氣の乏しい、容易に指先ですりつぶすことのできる、石灰質の砂質粘土である。李氏の調査（註一）によれば、これは粘土質物、石英及び長石等を主要素とし、化學的成分は硅酸を主とし、礬土、石灰等を含んでゐる。成因については所説區々であるが、リ氏及び既述バンベリ探檢隊などの推定によれば、これは蒙古及び中亞方面から定風――今日の冬季モンスーンと恐らく同性質の――によつて地質時代（第四紀初期）に運ばれたもので、これが草原（ステップ）帶の草に受けとめられて砂丘をなし、その上に新しい草を生じ、或る世代の草が他の世代の草の上に積み重なり、そこにあつた、もしくは飛來した多數の貝殼や動物の殘骸と共に、幾世紀の間に石灰化した草根の小纖維によつて、四ッ目格子狀に區切られて、多孔質の、垂直に排列された、水にあへば縱に裂け易い土層となつたのである。このことから、次の諸特徴が發生する。

「黄土の最も大きな特徴のひとつは、特に耕作の容易な點である。まさにこの故に、國家發生時代

の支那人は、比較的迅速に北部に移民したのであつた。イギリス及び獨逸においては、新しい土地の開墾は、非常に複雜な困難な事業であつて、それは協同體によつて遂行せられ、そのためには特に重い犂と、時には六七頭の畜類を必要とした。」（マヂヤール（Madiar）「支那農業經濟論」邦譯九五頁）

そのうへ肥沃である。

「水分の比率が惠まれてゐる時には、黄土は炭酸加里、燐及び石灰の豊富な貯藏によつて、非常に肥沃な土壤である。」（Lyon. Fippin. Buckman, Soils: Their Property and Management. p.61.）「周原膴々、堇荼如飴」（詩、大雅、綿）

そして絶えず若返る土壤である。

「何よりも重要なことは、レス土壤が雨水の濕氣を吸收して、この水分が地下の深處で地下水に出遭ひ、地下のレス地層の最も豊富な榮養分を、毛細管現象の法則によつて吸ひ上げ（中略）地表に表はれ來る點である。」（マヂヤール、前揭書九六頁）

農學者 King は、嘗て羅馬において失敗に歸した――土地貧瘦化のために――農業が、東洋ではどうして成功してゐるか、三、四十紀もの間耕作せられた後に、なほこれほどの稠密な人口を養ふに足るだけのものを生産し得るのは何故であるか、といふ疑問を提出してゐるが、（註二）この「永久農業」の物質的條件のひとつは、黄土のかやうな更新性にある。「乾燥亞細亞」において、半遊牧的生活に從つてゐた原支那人が、渭水盆地のレス土壤に接するに及んで、そこに農耕の民として定住する

に至つたのは、まことに自然の理である。

「渭水の河谷及び今日の河南の懷慶の近傍、黃河沿岸の平原は、最大の豐饒性をもつた黃土盆地であり、それ故また同時に、純粹に農業文化として發生し、農業なしには全く考へられない支那文化の出發點である。このほか北方の多數の、黃土で蔽はれた河谷も、高い收益を與へてゐる。そして二千四百米の高さの山までも、粘り强い疲れを知らぬ農民は、黃土がこの可能性を與へてゐる限り段丘形の畑を耕作してゐる。」(ラランケ、前掲書六〇頁)

(註一) Lee, A Preliminary Study on the Chemical and Mineralogical Composition of Loess. Vol.II.東方學報、第五册による。

(註二) King, Farmers of Forty Centuries. p. 16—17.

併し、レス土壤の更新性は、近代支那の社會的逼迫を乘り越えるほどに、强力ではなかつた。

「耕地は休閑せられず、毎年植物の營養にとられた諸成分は、土地に返却せられず、土地は完全に貧瘦化してゐる。」(Richthofen's Letters. q. 82.)

「河川の流域の土壤は、曾ては非常に肥沃であつたが、幾世紀の不斷の耕作の結果瘦せて、現在では不斷の施肥を要求してゐる。」(Arnold, China. A Commercial and Industrial Handbook. p. 291.)(ヤヂヤールによる)

二

土地は、日常的＝經驗的には、人間を始めすべての地的存在をその全體において、最も基礎的に支持し安定させる物質的基體であり、さらにすべての生存者がその生活を展開する基體的な場所、

したがつて存在者相互の聯關、影響、交渉を媒介する原始的な場所であり、次に生存者にその生活資料を供給する最も根源的な母胎であり、第三にあらゆる存在がその壞滅において歸着する最も顯著な限界點である。

人間が、土地のかやうな原始的基體性と、その最も顯はな、直接な、生々しい形において、しかも全面的な關係において出會ふのは、商工的生活形態においてゞあるよりも、むしろ狩獵遊牧的な生活においてゞあり、そして特に農耕的生活形態においてゞある。

土地は勞働と共に、人間の經濟生活にとつて不可缺の要素であり、しかも資本財とちがつて、その利用し得られる面（Bo lenfläche）が、一應不可變的に制限せられてゐるために、勞働、資本と共に生產の三要素に數へられるものであるが、土地のこの要素的性質と、不斷にそして直接に出會ふものは、一般的に見て、特に農耕的生活形態である。こゝでは土地と勞働とが、唯一の富の源泉だからである。こゝに土地に對する人間の生活的關心の、第一の親近性が成立する。

土地の性質は、經濟的觀點から、その位置と肥沃度とに分けられる。この二契機は、現實的には互ひに聯關して一つの使用的價値を構成するのであるが、いま注目せられるのは後者である。肥沃度は、工業的肥沃度と農業的肥沃度とに分けられる。前者は專らその土地の礦物含有量に依存し、人力を以て左右し得ないものである。しかるに後者は、土地含有物の量と關聯する植物培養力と榮

養力の度合であり、人力を以て左右し得るものである。したがつて工業的肥沃度は、全く消耗的であるが、農業的肥沃度は恢復的である。そして工業的な生活關心の對象は、土地の一部であり、農耕的な生活關心の對象は、全體としての土地そのものである。前の場合、土地に對する人間の關心は、對象の消耗性の故に暫時的であり、後の場合には、その恢復性の故に永續的である。こゝに農耕的生活形態における、土地への關心の第二の親近性卽ち一定の土地に對する親近性が成立する。農耕的生活形態に特に顯著な人間の土地への定着がこれによつて可能となる。放浪的な生活から土着的な生活への轉化は、文化の生成發展、人間思考の生長のための顯著な足場が築かれたことを意味し、同時に生活の土着性にもとづく思考乃至文化の停滯性の契機が胚胎したことを意味する。

人間の、土地への定着が、國家生成の先行條件であるといふ點は暫く措き、この定着から發生するひとつの現象は、土地一般が、そこに人が生れ、そこへ人の歸るべき場所だといふ意識(註)を貫く、特定の土地が、悠久の昔から自分の父祖たちの眠る場所だといふ、切實な意識である。この意識が一定の土地に對する人間的關心の第三の親近性乃至依存性を規定する。人間の Nativeness 土地の「鄕土性」が、最も鮮やかに現象するのは、このやうな段階においてゞあり、そして封建的社會體制の一特色、家族制度の觀念的樞軸「祖先崇拜」の觀念も亦、農耕的生活において、始めて本格的に成立すると考へられる。

（註）「至哉坤元、萬物資生。」（周易、彖上傳）

「衆生必死、死必歸土。」（禮記、祭儀）

「ある時代のある年には、そこに男女の遺骸が葬られたこともあつた。それも今は土に還つたのである。時が來れば彼等の家も彼等の骨も亦土に還る。凡てのものがこの土の上に生れ、順を追つて土に還る。」（P.Buck, Good Earth. 新居譯による）

老莊の「萬物同根」「萬象歸一」の觀念も、發生論的には、上記の諸觀念とひとつの聯關をもつであらう。

三

いま我々は、農耕的生活における土地と人間との一般的關係を見たのであるが、この關係は支那においてどんな樣相をとつたであらうか。

支那における「永久農業」の物質的條件が、肥沃度における黃土の自己恢復性にあることは、既に述べた通りであるが、他のひとつの條件は、施肥における人糞尿の利用である。土化法が支那において何時頃始められたかは明らかではないが、「周禮」には種子の浸種法、土壤への骨汁撒布の記事が見え、有名な氾勝之の「耕織圖」は、漢代における人糞尿による施肥の普及を傳へてゐる。無限の未開地があるにも拘らず、支那において耕作に充てられる土地が、極めて狹小だといふ事實について、リヒトホーフェンは述べてゐる、「產出穀物の量は、こゝでは主として既耕地の面積と

現存人口の供給する排泄物の量に依存する」、「土地の耕作は勞働力の存在に對應して行はれずして現存の人口が糞尿を提供し得る面積を考慮してなされる。」(Richthofen, China. Vol. II. p.133) この國の「永久農業」は、その基礎を、土地と人間とのかゝる切迫した親近性のうちに持つてゐる。「支那農業の『自然』律のひとつは、次の事實である。卽ち、人が飢えると土地も亦飢え、土地が飢えはじめる時には、人間は既に飢えてゐる、と。併しながらこの『自然』律は、支那社會體制から生じたものである。」(マヂヤール、前揭書八五頁)

土地と人間とのかやうに切迫した親近性は、次の諸事情によつて、或は修飾せられ、或は緩和せられる。

新鮮な黃土は肥沃である。農民は土地の貧瘦化を防ぐために、新しい黃土をその上に散布する。——北支那の町では、煉瓦狀に固めた施肥用の黃土塊を賣つてゐる。——併し新しい黃土は、何處から、何によつてもたらされるか。

「秋の强風は、非常に豊沃な砂を、大量に蒙古地方から運んできて、レス地帶に撒布してその肥沃度を高め、一方蒙古の肥沃度を奪ふのである。」(マヂヤール、前揭書、九八頁)

河江の氾濫も同じ役割をはたす。

「これは驚くべき量である。それは氾濫した水が、山地から、毎期數千噸の生產的な地層を押流し

てくることを意味する。」(Lowdermilk, Smith, Notes on the Problem of Field Erosion. p.227)

「速水(黄河支流)の水は深く、夥しい泥土を含んでゐる。そして毎結氷期の直前直後に、それが灌漑に用ひられる時には、田畑は二倍も肥沃になる。それ故に無知な農民は、屢々ひそかに堤防を切つて、河に堰をつくる。」(山西通志、六七卷三〇頁)

地と人との繋がりは、これに盡きるのではない。土地は東洋において、――特に封建的段階における東洋において――人間の主食物をはじめ、衣服、履物および住居の資料を、その原始的な形態において、したがつて土地に卽した關係において――石塊、土塊、藁、繩、高粱など――提供する。

「下級民家の屋根は、藁葺か又は高粱の束を天井に列置して、其の上に土を載せ、かまぼこ形屋根とする。」(藤島博士「建築」漢文學講座九頁)

この場合、レス土壌は、神話的過去から今日に至るまで、人間の住居でさへもあつた。「古公亶父、陶復陶穴、未有宮室」と詩經は報じてゐる。

「材木の乏しいこの地方では、これは夏涼しく冬暖い好適な住居である。煙突が洞穴の上の畑までつき抜け、畑の中から煙が出てゐる。河南省の黄土層には學校、兵營、商店等も設けられて居り、穴居生活者は百萬から百三十萬を數へられてゐる。」(國松久彌「新支那地誌」二四頁)

土の家は、肥料として、土に返される。

「揚子江流域の農民は、三、四年毎に粘土で造つた自分の家を破壞して、新しく家をたてる。使ひ古された粘土は、優れた肥料になるからである。煉瓦や竈も賣却せられる。砂も搔き集めて賣られる。」(マヂャール、前揭書八五頁)

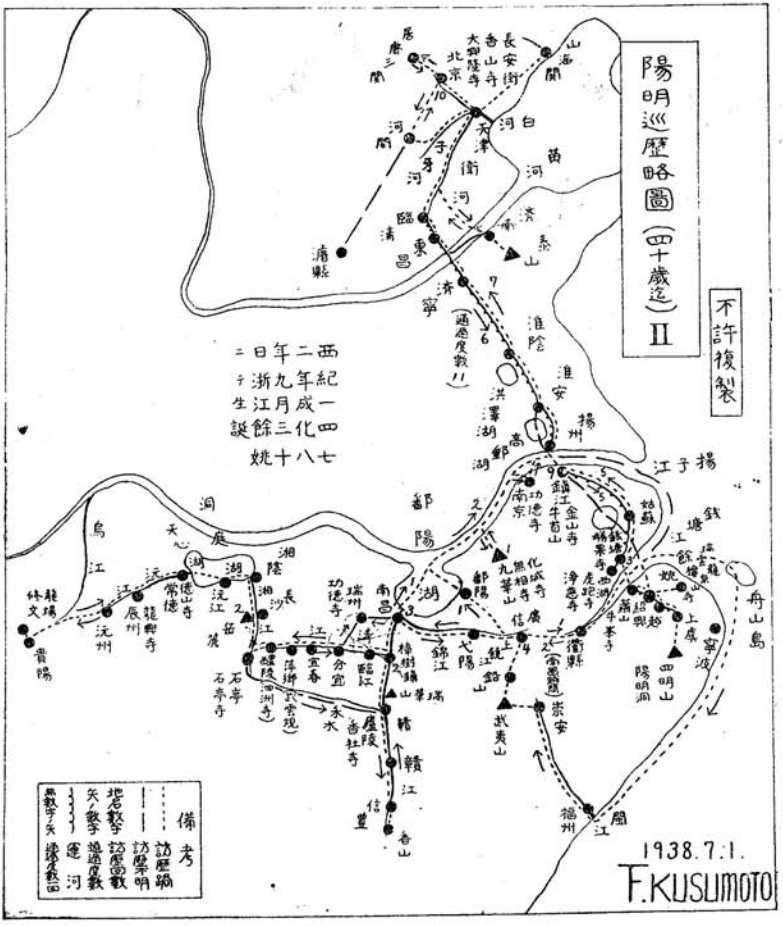
そして、時には人間の食料でさへもあつた。次のやうな狀況は、支那において、決して珍しい現象ではない。

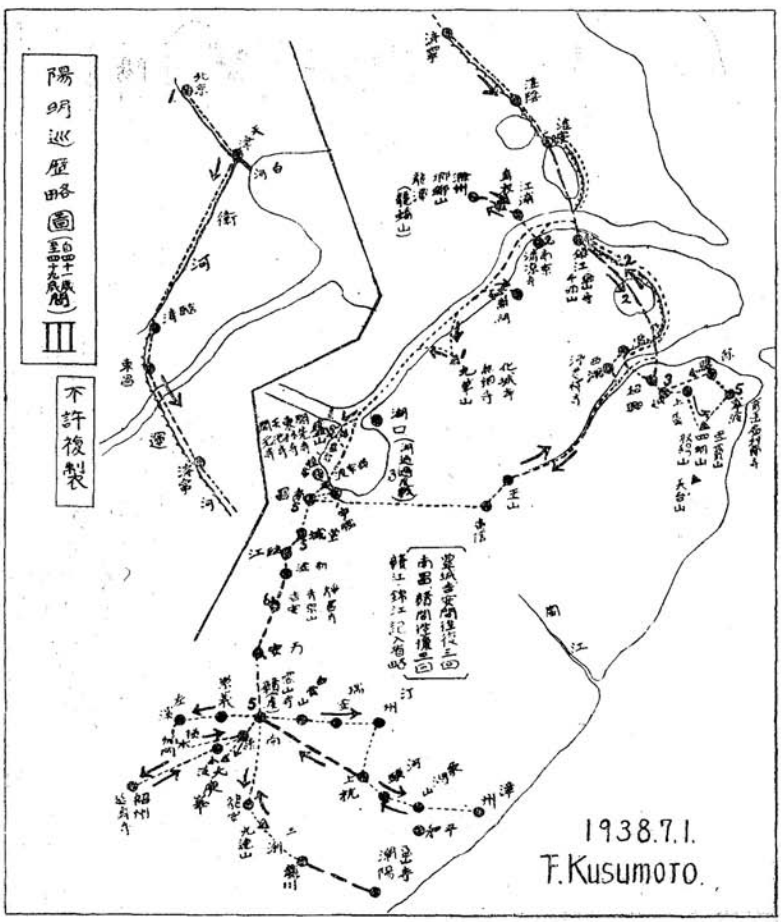
「鄆水の災民は三十萬に達し、多くは觀音土、樹皮、草根を以て食に充てゝゐる。」(東京商工會議所編「支那經濟年報」十二年度版)

このやうにして我々は、土地と人間とが、とくに支那の大地と支那農耕の民とが、いかに緊密な生命的な繫がりにあるかを理解したのである。パール・バックの"Good Earth"は、支那農民の土地に對する異常な愛着——社會的事情によつて、多少とも病的にせられた——を描いてゐるが、「詩經」は夙に、大地に耕すものゝ誇りと歡び(周頌、載芟、小雅、信南山)、憂ひと悲み(大雅、桑柔、雲漢)とを傳へてゐる。「この地上の大國民で、支那の國民のやうに、その自然的環境と完全に融合して一箇の統一體となり、故鄕の土地の重要性を深く確信し、自分が全自然の一部であると强く思ひ込んでゐるものは、嘗て無いのである。」(フランケ、前揭書二五〇)「日出而作。日入而息。鑿井而飲。耕田而食。帝力于我何有哉。」(「古詩源」卷一)

このやうにして、支那農耕の民は、アンダースンが呼んだやうに、まさに、"Children of the

Yellow Earth" であつた。「黄土は、支那の肥沃な地方の殆どすべてを蔽つて居り、その特性は支那の農業及び歴史をさへ運命づけてゐる。」(Richthofen's Letters, p. 123.)（未完）


陽明巡歷略圖（四十歳迄）II
不許複製
西紀一四七二年
成化八年九月三日
餘姚江生誕
北京
大興隆寺
香山寺
長安街
天津
臨清
東昌
濟寧
泰山
淮陰
淮安
洪澤湖
高郵湖
揚州
江都
南京
鎮江
金山寺
蘇州
杭州
紹興
餘姚
上虞
寧波
舟山島
四明山
陽明洞
衢縣
玉山
上饒
信江
鉛山
武夷山
崇安
福州
閩江
九華山
無相寺
化城寺
淨慈寺
虎跑寺
西湖
錦江
贛江
贛州
吉安
吉水
永丞
宜春
分宜
臨江
清江
南昌
豫章
南昌
鄱陽湖
廬陵
吉水
石亭寺
石亭寺
長沙
湘陰
湘江
常德
辰州
沅江
沅州
貴陽
天心
洞庭湖
烏江
都陽湖
信豐
備考
訪歷蹟
訪聖明
北岩數字 訪歷回數
矢ノ數字 巡遊度數
運河
黑數字矢 巡遊度數回
1938.7.1.
F.KUSUMOTO


陽明巡歴略圖（西暦一五八八年）
III
不許複製
1938.7.1.
F.Kusumoto.